

自然誌 だぶり 秋

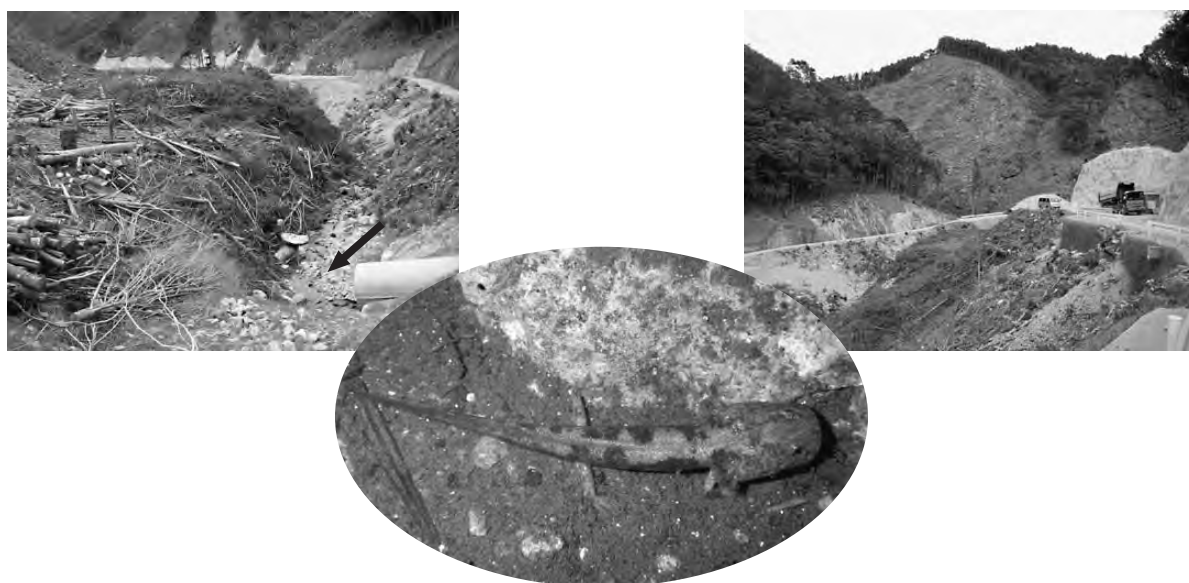
Natural history

三重自然誌の会情報誌 70号

2006年 11月

天然記念物無情

私の故郷は熊野市紀和町で、帰省したおりによく訪れる場所に同町大河内地内の楊子川流域があります。一帯には滝100選「布引の滝」や町指定「切らずの森」などがあり、絶滅危惧種のルーミスジミやヤチネズミ、天然記念物のカモシカやオオダイガハラサンショウウオも生息しています。このように生物多様性豊かな地域ですが、数年前から谷沿いに林道が延び続けているのが不安材料です。工事のようすからは、山奥のあまり人目にふれない場所で行っているせいか自然環境への配慮は乏しいようです。守るべき対象であるルーミスジミの食樹であるイチイガシや、ヤチネズミの生息するガレ地を積極的に残しているようには思えません。また、この夏に訪れたときにはオオダイガハラサンショウウオの幼生が生息する谷一帯にも、無惨な工事の手が入っていました。わずかな水たまりに幼生が生き残っていましたが、餌や日照条件の大きく変わった環境で成体まで成長できるのか心配です。さらに工事の際には、多くの幼生や付近に住んでいた親がきっと犠牲になっているはずですので、文化財保護法に触れると思い県担当部署に連絡しましたが、現行犯でないかぎりお咎めはないそうです。残念ですが、法とあれば仕方ありません。しかし、このような大胆な工事は昨今はあまり見られなくなりましたので、一見の価値はあります。県道780号線から三浦の集落を過ぎて楊子川本流沿いです。お出かけください。



生き残った幼生（中）と生息環境（左）。林道効果で早速伐採された民有林（右）。2006年8月16日撮影

〈清水善吉：松阪市日丘町1386-17〉

熊野灘流入河川における希少甲殻類の確認

上 野 淳 一

2006年8月9～10、24～25日の4日間、東紀州の各河川河口域においてカニ類の分布調査を行った。今まで県南部の河川をあまり詳しく調査していなかったため、大潮の干潮時を狙って紀伊長島、尾鷲、熊野地方を中心に調査を行った。

尾鷲市と熊野市の境に位置する古川（賀田）の河口域（写真1）では三重県レッドデータブック2005に掲載されているタイワンヒライソモドキ *Ptychognathus ishii*, カワスナガニ *Deiratonotus japonicus* の2種を確認した。（写真2, 3）

タイワンヒライソモドキは砂泥底の転石下にのみ♀共に豊富に見られたが、カワスナガニは2日間潮が引いている間必死に搜索しても♀1個体しか発見されなかった。一個体発見すればその近辺には同種が生息している場合が多いのだが、当地域ではカワスナガニは非常に個体数が少ないと考えられる。カワスナガニはレッドデータブックに記載されているように県内では36年間確認記録がなく、私自身、本種を確認したのは今回が初めてである。本種は近年、県内での生息確認記録がない上、外見上地味で非活動的であるため、県内のどの地域に調査の目をやればよいのか分からなかった。今回、初めて実物を自分の目で確認し非常に感動した。

この古川では以前は本種の個体数が多かったのか、もともと少なかったのかは資料がないため不明であるが、河口部の兩岸ともかなり古い年代のコンクリート護岸が施されているが、近年はこの環境が保たれていると思われる。

調査ポイントを変更して尾鷲から熊野にかけての各河川を順次調査したが、河口の地形そのものが貧弱でありあまり興味のある種が生息しておらず、県最南端の熊野川河口にたどり着いた（写真4）。熊野川河口にはまとまったヨシ群落が見られ、ある程度軟泥も堆積しておりカニ類の種数もイワガニ科からスナガニ科まで豊富であった。

この熊野川河口では衝撃的な発見があった。尾鷲市の古川で必死に搜索してたったの1個体しか発見できなかったカワスナガニが、なんと砂泥底の転石をめくる度に見つかったのである。タイワンヒライソモドキとカワスナガニが同じ割合で見られ、その一帯で優先していた。タイワンヒライソモドキについては、古川で確認した個体に比べて熊野川の方が全体的に大型個体が多数生息していた。



写真1 古川（賀田）の河口域



写真2 タイワンヒライソモドキ



写真3 カワスナガニ



写真4 熊野川の河口域

カワスナガニの分布については、県内では尾鷲市の古川以南に生息し、最南端の熊野川では高密度であったことからやや南方系であることが示唆された。また、河口から約1～2km上流の砂泥地の転石下に多く生息しており、汽水域を好むことが分かった。タイワンヒライソモドキの生息域よりも狭い範囲で生息するが、この2種は大抵セットで見つかるため、よく似た底質、塩分濃度の環境で生息することが推測できる。しかし、カワスナガニの詳しい生態は未だによく分かっていない部分が多いのが現状である。

これから先、県南部の河川河口域をさらに詳しく調査し、新たなカワスナガニの生息分布を発見するとともに、周辺の環境がカワスナガニにどのような影響を与えるのか考えていきたい。

〈うえの じゅんいち：東海大学海洋学部〉

マゴコロガイを田中川干潟で発見

津市河芸町地内、田中川干潟でマゴコロガイ *Peregrinamor oshimai* Shoji 1 個体を発見したので報告する。

2005年4月4日、同干潟の石積み堤防中央から、南へ13mの砂泥地で、カニ類の観察中に小学生が見つけたアナジャコ *Upogebia major* の胸部腹面に寄生していた(写真1)。発見個体は、写真撮影し、その場で放逐した。

マゴコロガイはアナジャコの胸部腹面に足糸で付着する二枚貝である。伊勢湾では、1989年に津市志登茂川河口で初めて発見記録された(木村・山本, 1990)。今回は2例目、16年振りの発見となった。本種は、三重県レッドデータブック2005(三重県, 2006)では情報不足DD, WWWJapan サイエンスレポート(和田ら, 1996)では絶滅寸前にランクされている。

マゴコロガイの発見者である鈴鹿市立郡山小学校(当時)の米川幸伸君、貴重な資料を提供していただいた木村昭一、木村妙子両氏に深く感謝します。

文献

木村昭一・山本妙子. 1990. マゴコロガイを伊勢湾で採集. ちりばたん, 21(1/2): 12-13.

三重県. 2006. 三重県レッドデータブック2005動物. 三重県環境保全事業団: 498p

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島 哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤 真・

島村賢正・福田 宏. 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状. WWF Japan Science Report

〈締次美穂：津市河芸町〉



写真1 アナジャコの胸部に寄生するマゴコロガイ

ヤスデの大量発生

上 田 利 彦

日本には約185種のヤスデがいるそうですが、人家の周辺で見られるヤケヤスデ *Oxidus gracilis* は、しめったところに生息し、植木鉢の下などにいて棒先で触れたりすると丸まって死んだふりをします。大きさは2 cmほどでこげ茶色をしています。

足がたくさんある多足類でムカデと同じですが、ムカデは1体節に1対の足に対してヤスデは2対の足があります。また、ムカデと比べると動作が緩慢です。

さて、数匹が植木鉢の下に潜んでいるぐらいなら特に気にもならない存在ですが、今年わが家ではこのヤスデが大量発生しました。雨が降りそうになると乾燥したところを求めて庭から家の犬走りに向かって這い出てきます、あるものは家の中まで侵入して2階の部屋でもテレビを見ていると天井からポトリと落ちてくる……。やっかいなのは、こいつをつまんでほろりと触ると臭腺から異様な刺激臭を出すこと、あるいは廊下で踏みつけるとブチブチッという感触と臭いうえに体液が出てシミができること。さすがに、生き物好きの私も、最初のうちは足があるんだから入ってきてても当たり前、これも自然だ！ と笑っていましたが、度重なる悲劇に家族から非難されるのには閉口してしまいました。



ヤスデの形態

とはいえ、自然の中では土壌生物の一員で落ち葉などの有機物分解者として重要な役割を担っている訳ですから、そのほかの生物も含めそれを駆除するような薬剤を散布するわけにもいかず、暇を見つけてはピンセットを片手に一匹ずつ捕獲して飼育中のヒキガエルに与えることとなりました。ヤスデは集団行動が好きなようで、ものの10分ほどで百匹をこえるほどの数を捕獲することもありました。さて、ヒキガエルは最初のうちは一生懸命パクついていましたが、動くものなら何でも飛びつくヒキガエルがほんの数日で見向きもしなくなったのは、やはりあまりおいしくなかったのかもしれませんが。

大量発生の理由ははっきりとはわかりませんが、我が家は家の周りでメダカやカメ、カエルを飼育し常時湿り気があること、また鉢物があり毎朝夕水やりをすることからヤスデの好む環境が備わっていたものと考えています。思えば、昨年も今年ほどではないにしろヤスデが多いなあとは感じていました。梅雨が明けて家の中まで侵入する輩は少なくなったものの、夕立のあとなどにはあちこちで見かけます。また、いつ見ても2段になって行動しているものが出て、おそらく生殖行動ではないかと思われまふ。ということは、来年もまた悩まされることになるのでしょうか？

話は変わりますが、今年の春に近くの茶畑で犬の散歩中変わった木の実？ と思って拾ったのが丸まって死んでいる大きなヤスデでした。どうも長野県の小海線で大量発生して線路に侵入しつづれたときの体液で車をスリップさせて止めてしまうというキシヤスデ（オビハバヤスデ）のようです。ところが、生息地域がはっきりせず本種かどうかは解りません。オビハバヤスデの県内での記録がありましたら教えてください。

〈うえだ としひこ：津市久居一色町〉

鈴島に上陸したニホンジカについて

清水善吉・山本和彦

はじめに

鈴島は紀北町紀伊長島区三浦の高塚公園の岬から約1 kmの沖合にあり（写真1）、南北800m、東西600m、面積約28haで、北側に標高74m、南側に標高101mの山頂がある。本島は、県指定天然記念物「鈴島暖地性植物群落」および国設鳥獣保護区として保護され、渡島も制限されている。また、県指定希少野生動植物種であるハマナツメの群落、カラスバトやウチヤマセンニュウの繁殖も確認されている。



写真1 海峡。左が三浦、右が鈴島

鈴島へのシカ上陸の第一報は、鳥類調査で同島を訪れた武田恵世氏によってもたらされた。

2004年6月18日に撮影したシカの死体と足跡、

食痕等の写真が届けられ、それを受けて同年7月9日に現地調査を行った。シカによると思われる採食痕が海跡湖周辺に生育するシバナを中心に認められたが、新たな足跡等は確認できなかったことから、上陸は1個体で、死亡したものと判断した。ところが、鳥獣保護区管理員の堀内弘氏がその後の調査で新しい足跡を発見し、本年6月21日に渡島した際にはついに樹皮剥ぎの発生を確認した。鈴島にはこれまで草食獣は生息していなかったことから、今後の植生変化や生態系への影響が懸念されたので現況調査を実施した。

なお、調査には紀北町、三重県および環境省職員も同行した。

調査日時

2006年8月29日10時～14時

調査地

紀北町紀伊長島区三浦の「鈴島」で調査を実施した。同島には西側海岸部に南北ふたつの海跡湖があり、その周辺の平坦部を中心に踏査することにより植物の被食状況およびフィールドサインを記録した。被食状況についてはその種類を判定し、樹木の場合は胸高周径、樹高、新旧等を、フィールドサインについては、地図上にその種類とおおよその位置を地図上に記し、糞については粒数を調べ、一部の足跡については長径を計測した。また、南側の海跡湖東側谷部のヒノキ植林地についても、同様の調査を実施した。

結果および考察

（1）植生への被害状況

被食植物は、樹木類ではイヌビワ、トベラが多く、草本類ではコヤブラン、シバナが広い範囲に渡って被害を受けていた。とくにシバナは三重県版レッドデータブックに絶滅危惧ⅠB類として登載されている種で、本島では南側の海跡湖周辺に比較的まとまった群落が確認されていた。この群落は、2004年の調査時ではすでに被害が見受けられたが、群生状況は維持されていた。しかし今回の調査では、花期であるにもかかわらず全く現存個体は認められなかった。被害により消滅したと思われる。

その他樹皮や葉への被害がみられた植物は、ヒメユズリハ、コバンモチ、ホルトノキ、アラカシ、ヒノキ、サカキ、シロダモ、ネズミモチ、ナワシログミ等の樹木類であった。このうちコバンモチ、



写真2 剥皮が全周に及んだ樹木

ホルトノキ、ヒメユズリハ、アラカシ等は樹高10m前後のものが被食され、なかには幹の半分あるいは全周を剥皮されているものもみられた(写真2)。これらの樹木は、本島の暖温帯性常緑広葉樹林の林冠を形成する構成種群であることから、枯死による高木層構成種の減少や高木に営巣する野鳥への影響が懸念される。

なお北側の海跡湖岸辺に生育しているハマナツメ(三重県レッドデータブック2005絶滅危惧I B類、三重県指定希少野生動植物種)への食害は今回の調査では認められなかった。しかし、尾鷲市大池や南伊勢町のいくつかの生育地では、

ハマナツメも剥皮の食害にあい、枯死木もみられることから、本島のハマナツメも近いうちに被食されることは必至と思われる。

(2) その他のフィールドサイン

上記の植物への食痕以外に、足跡、掘り跡および糞を確認した。

足跡や掘り跡は海跡湖周辺に点在していた。特に、南側の海跡湖東側の湿地帯では多くの足跡が確認され(写真3)、比較的明瞭なもの18個について長径を計測した。足跡の最小は60mm、最大は82mm、18個のサイズ内訳は60~65mmが6個、70~75mmが5個、80~85mmが6個、残りの1個は68mmであった。この結果は、複数個体の生息を示唆するものであるが、調査地は谷部からのしみ出し水により常に湿潤な状態であり、足跡も水の影響をうけて原型をとどめにくい条件であったことから、その影響も考えられる。糞は4か所で確認し(写真4)、1か所の糞は新鮮なもので、脱糞後1~2日程度のものであった。各か所の粒数は10~30程度であった。



写真3 足跡

鈴島は、一部が植林されているものの大部分が常緑広葉樹林で覆われており、林内にはシカの餌となるような林床植物は少ない。一方、今回調査を実施した海跡湖周辺は草原状となっており、シカの生息には適した環境にあり、主たる生息場所になっているものと思われる。

なお、対策については、今後、三重県教育委員会文化財保護室(天然記念物)、同自然環境室(指定希少野生動植物種、レッドリスト種)、環境省(鳥獣保護区)等の協議により進められるものと思われる。



写真4 糞

〈しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17／やまもと かずひこ：尾鷲市小川西町8-40〉

志摩市和具大島におけるアツバキミガヨランの駆除

半 田 俊 彦

志摩市志摩町の南にある和具大島は、ハマユウやネコノシタなどの海浜植物が群生し、全域が三重県の天然記念物に指定されている周囲800mほどの無人島です(写真1)。和具漁港から約2.5kmの距離に位置し、かつては海水浴などで訪れる人も多かったそうですが、現在は立ち入りが制限されています。志摩半島野生動物研究会では、数年前からアカウミガメや海浜植物の調査のために渡島し、島の自然を見てきました。



写真1 和具大島の遠景

その調査のなかで非常に気になったのが、外来植物であるアツバキミガヨランの存在です。アツバキミガヨランは北アメリカ原産の樹木で、通称「ユッカラン」と呼ばれています。日本には明治中期に持ち込まれ、公園樹や庭木などとして各地に植えられました。花粉を媒介する昆虫が日本にいないため結実しないのですが、野生化した個体が多く海岸で見られています。和具大島で2000年に植物の調査をした時には、背丈ほどもある大きな株が島全体に見られ(写真2)、ハマユウの群生地として知られていた島が今度はアツバキミガヨランの名所として有名になるのではないかと思えるほどに繁茂していました。

この当時、和具大島の天然記念物を管理していた志摩町(現志摩市)の教育委員会は、事態を認識し、駆除をはじめていました。しかし、地上部を刈り取るだけの駆除方法ではたくさんの脇芽が出て、逆に分布を広げているように思われました。そこで、2004年度から環境省の事業として志摩半島野生動物研究会が現状を調査し、効果的な駆除方法について検討することになりました。また、昨年から多くの一般が参加し、志摩市の協力も得ながら、根まで掘り取る方法により駆除することとなったのです(題して「ユッカラン駆除作戦」)。

「ユッカラン駆除作戦」には、去年は約100名が参加し約7トン駆除しました。また、今年はこれまで3回の作業に約80名が参加して、約3.5トン駆除しています(写真3)。しかしアツバキミガヨランが分布している面積からすると、まだ半分程度しか作業ができていないと思われます。また、これまで駆除した地点でも掘り残した根からの発芽が多数確認されており、これらの処理についても課題となっています。

和具大島のアツバキミガヨランを根絶させるには、今後何年かかるかわかりません。離島での作業



写真2 和具大島のユッカラン(2000年8月27日)



写真3 駆除作業のようす(2006年10月11日)

となるため天候に左右されるだけでなく、渡船費をはじめとして多額の費用もかかります。また、天然記念物に指定されている在来の植物群落や、島内で繁殖する野鳥への影響を最小限にするため、作業の時期や方法についても制限されます。そのため厳しい条件の駆除作業となったにもかかわらず、参加して下さったボランティアの方には大変感謝しています。今後、駆除と併せてアツバキミガヨランの侵入・拡散の防止についても検討し、この取り組みを他地域でも生かせる事例にすることが出来ればと考えています。

〈はんだ としひこ：志摩半島野生動物研究会〉

事務局から

○「個人所蔵標本データベース化」第1回会議

今年度から着手する事業ですが、植物についての第1回会議を下記のように行います。参加を希望される方は事務局（0598-58-0544）か世話人・山本和彦さん（05972-3-2696）までお知らせください。

日 時 12月10日(日) 午前10時～

場 所 玉城わかば学園（玉城町宮古）

内 容 事業の方針や方法、日程等

○三県合同シンポジウムの案内

前号でもお知らせしましたイベントの案内を同封します。参加申し込みの期限は過ぎてますが、希望される方は11月17日(金)までに事務局・清水（TEL・FAX0598-58-0544）までお知らせください。

○ホームページの充実にご協力ください。

前号でお知らせしましたように三重自然誌の会のホームページを開設しています（アドレスは最下段）。運営委員の上田さんが中心になって整備していますが、この便利な道具を使って会員の皆さんが情報や意見の交換をできないかと思っています。身近な自然の事象や三重県の自然やその保護についての意見をお寄せください。なお、その中から事務局の判断により会報に掲載させていただく場合もあることをご了解ください。

○会費を納入ください

会費未納の方につきましては前号でお知らせしましたが、まだお支払いいただいていない場合は至急お願いします。

編集後記

先日、伊勢志摩国立公園の野生生物をテーマにしたシンポジウム（志摩半島野生動物研究会等主催）に参加しました。私にも同公園内の哺乳・爬虫・両生類というテーマでの発表依頼があり、まとめるにあたって過去の文献にあたりましたが、あまりの少なさに驚きました。自然を調べ、記録するという本会の活動の重要性を再認識した次第です（善）。

自然誌だより70号

発行日 2006年11月1日

事務局 〒514-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp